

9. 物見台「第10図」

館山城跡の範囲で最も標高が高いのが物見台①の327.36mである。物見台は②の堀切を掘削した土砂を盛り上げて構築したもので、長径18.5m、短径9.2mの不整形を有する平坦部には江戸後期頃に祭られた石の祠が2基存在している。

1) 腰曲輪

物見台の北裾④と東側③に小規模な階段状の曲輪群が存在する。前者の④は腰曲輪の崩壊を防止する意図がある。後者の③は不整の方形をなすもので長径16m、短径12mの曲輪は物見台に付属する施設と考えている。物見台との比高差は4.8mを測る。

2) 堀切

縦堀と直行するように尾根を切断して堀切を構築するもので、物見台を囲むように弧状に配している。底面は縦堀面の②が広く、南に進むと（ロ）の部分で狭くなって段差を示した（ハ）で幾分広がっている。堀切の南側の上端には僅かな土塁がみられるが意図は不明である。規模としては、物見台を基準に計測すると最大幅で21.5m、深さ12mとなるが、堀切西側の上部からは最高で4.8mとなっている。

10. 人工斜面「第12図」

館山城を構築するために丘陵全体を削平整形していることが確認された。第12図に示すように北側の斜面は全域に亘っており、南側は標高290m～280mの等高線位までの斜面を整形している。

11. 山麓平坦面の遺構「第11図」

館山城跡の周辺にはかつて遺構が存在した痕跡がある。字切図及び現況の確認で判明したもので、館山城の北側と東側にはほぼ一町四方の区画地区が存在するものとみられる。

1) 東側方形区画

東端の遺構群の山麓の道路に接して存在するもので、東西約100m、南北約80mの範囲が想定される。現況は既に果樹園となっており、痕跡を確認することはできないが、字切図の中に土塁や堀を示す細長い字が示されている。

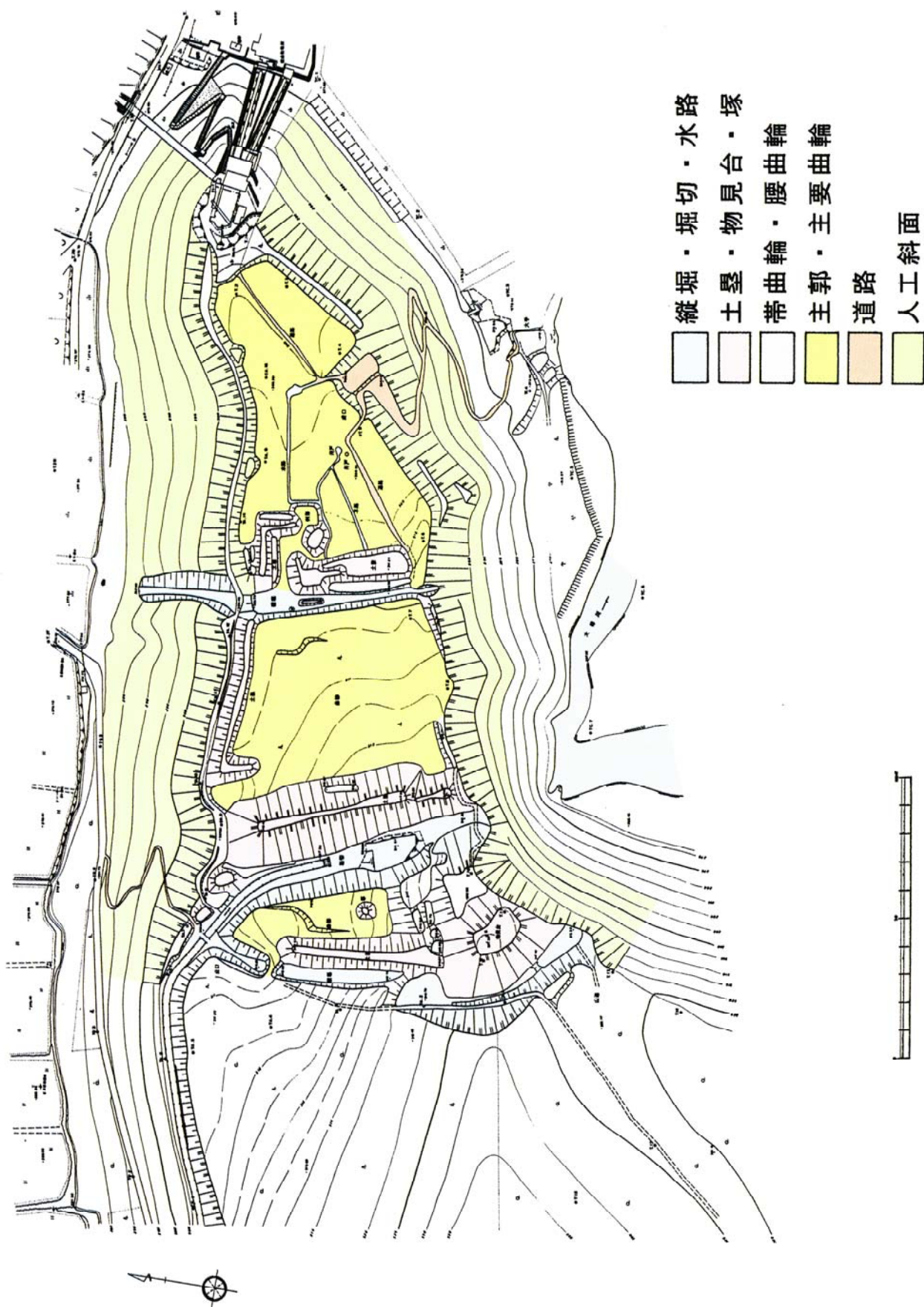
2) 北側方形区画

曲輪Ⅱの北側方向に存在するもので、現在は水田と池となっているが、一部東側に土塁の痕跡が残存している。字切図を参考に想定できる規模は、南北80m、東西90mの方形範囲と推測される。

Ⅲ 館山城跡の特徴と性格

1. 館山城の形態「第12図」

館山城は、丘陵斜面の大半を人工斜面に整形し、平坦な尾根を整地した後に土塁と縦堀、堀



第12図 館山城跡遺構分類図

切で区画した城館跡で、この種の山城としては置賜地区最大の規模をなす。土塁や堀切が顕著に発達しているのが特徴であり、恒久的な利用を前提とした典型的な山城に分類される。遺構の残存状態は良好で、城割・破城等の意図的な破壊行為は認められない。

主郭は曲輪Ⅱに求めることができ、副郭として曲輪Ⅰが存在する。枳形は方形を基本としているが、後世の破壊を受けて崩れている。裏込めと推測される円礫が多量に枳形付近に存在することは、地元の情報を裏付けるように枳形を切石の石積で構築していた可能性も高い。

曲輪Ⅲ及びその周辺は、最終的な堀切と縦堀、土橋、それに搦手や帯曲輪を通路とした遺構が接続していることを考えると軍事的施設の色彩が強い。また、曲輪Ⅲとした曲輪内に塚が意図的に構築している点は、宗教儀式を司る施設を有した可能性も指摘され、伝承の「寺跡」に土橋が通じていることも興味がある。

館山城の基本通路は大手からの侵入で、北側の帯曲輪は臨時的な道路として機能していたものと考えられる。曲輪Ⅰ～曲輪Ⅲの何れも北側の帯曲輪と接続していることも重要となる。

また、山城の山麓の空間を利用した2箇所の平城が存在していた可能性が極めて高い。何れも一町近い規模を誇るのが特徴で、中世の平城と推測される。館山城との関連については現在の段階では不明といわざるを得ない。

2. 館山城と東南置賜地区の城館跡分布「第13図」

1) 城の分布と街道

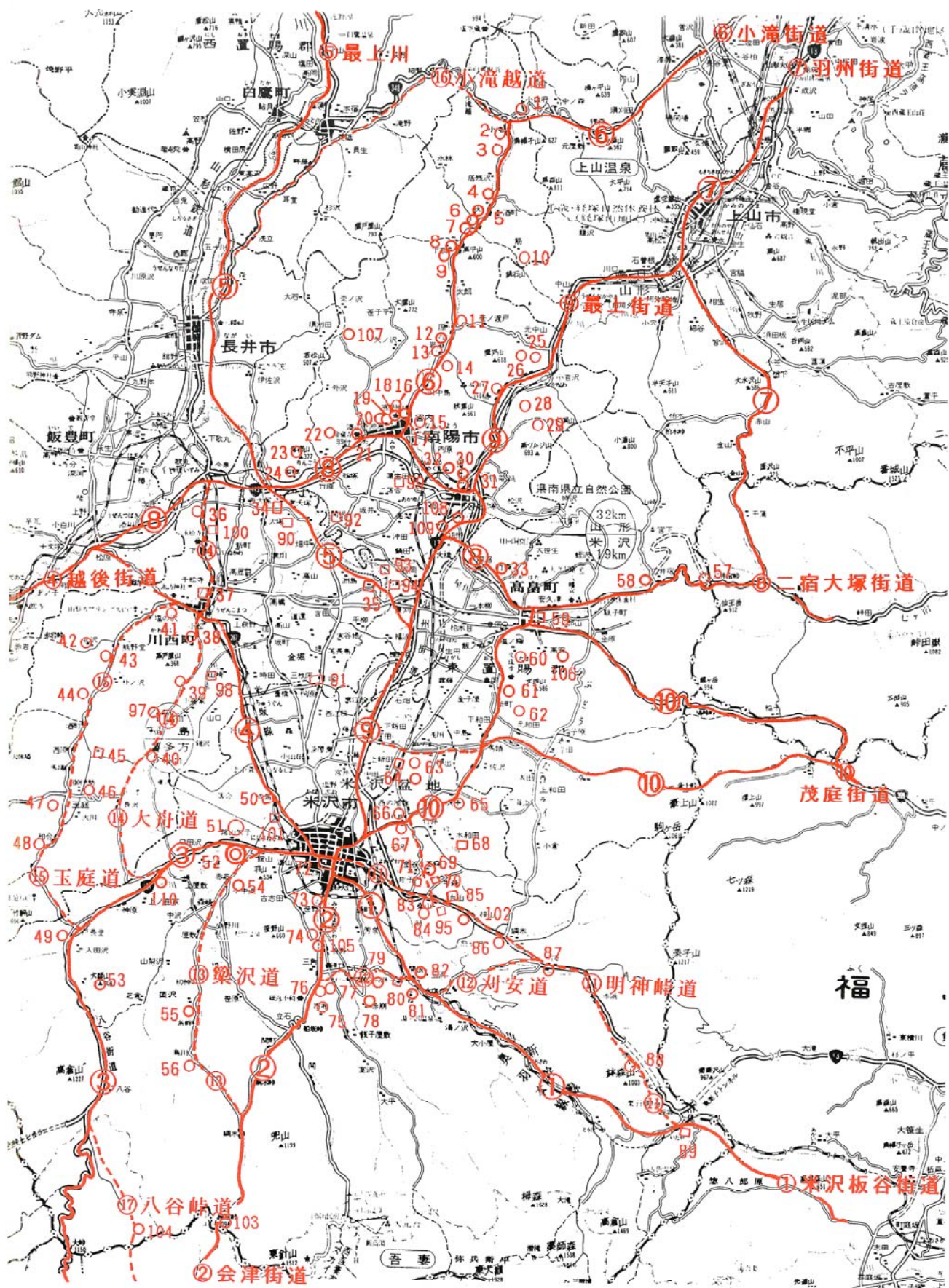
米沢を中心とした東南置賜地区には432箇所の中世城館跡が確認されており、大半を占めるのが平城で346箇所、全体の約2割弱の山城が86箇所となる。これらの城館跡の多くは伊達氏に係りを有するものと考えられ、形態の明確となった山城の全てと代表的な平城を加えた110を中世期の街道とともに図示したのが第13図である。

この図で注目されるのは、街道に意図的に配置したと考えられる山城の存在で、分布図をみると集中する箇所が顕著に表れている。特に、⑥の小滝街道や⑨の最上街道と⑧の二宿大塚街道を経由して③の大峠喜多方街道に向かう⑭の大舟道、⑮の玉庭道に主要な分布がみられる。

一方、米沢の東側に通じる主要幹線となる⑩の茂庭街道、⑧の二宿大塚街道、①の米沢板谷街道にはほとんど山城が配備されていないのが現状である。このことは、伊達氏の支配地域と有事対象国との境界防御を意図とした相違を顕著に示したものだといえる。

具体的には⑥の小滝街道、⑨の最上街道の山城に関しては最上義明を牽制や標的としたもので、伊達輝宗、政宗期に配備されたものと推測される。特に注目したいのは、⑭の大舟道と⑮の玉庭道の道路の存在である。両道路は小滝街道との接続が可能で、③の大峠喜多方街道に通じる重要なルートとなる。最上軍が仮に、小滝街道を突破してNo52の館山城の背後に迫ることも可能であり、大峠喜多方街道と合流する要所に存在するNo49の戸長里館跡やNo110の新田館跡はそれを想定した配備と考えられる。

同じ支線道路として重要な役割を有すると考えられるのが⑪の明神峠道と⑫の刈安道の存在で、東側の有事を想定したものであろう。



第13図 東南置賜地区の主要城館分布図

2) 山城の立地と分布

確認されている86箇所の子城を立地と地形から分析すると次の4種類に大別される。

〈山頂型山城〉

山の頂上に城を構築するもので、険しい要害地を条件に築城する特徴がある。米沢市のNo.83早坂山館、No.51矢子山城、No.86米沢羽山館、No.77中ノ在家館、南陽市のNo.32二色館、No.23龍樹山館、川西町のNo.97柳沢館、高畠町のNo.57屋代館など25箇所を数える。この型の山城はNo.83の早坂山館やNo.86の米沢羽山館を代表するように比高差が200mを超えるものも珍しくない。

一方、主要街道が交わる箇所も意図としていることを考慮すれば、広域の視野を前提に防御施設を備えた山城といえる。

〈丘陵先端型山城〉

山頂から延びる尾根の先端を利用して城を構築するもので、山麓に居館や城下町を形成する場合が多い。米沢市のNo.52館山城、No.65長手館、No.84鷲城、南陽市のNo.25岩部山館、No.18宮沢城、川西町のNo.43松之本館、高畠町のNo.61亀岡館等36箇所が確認されている。この型の山城の特徴に米沢市のNo.84鷲城や南陽市のNo.18宮沢城といった大規模な城下町に発展する拠点的な城館址を含め、置賜領から最上領に通づる小滝街道に23箇所、最上街道（米沢街道）に7箇所といったように、主要な幹線道路の沿線に配備されているものが大半である。

従って、丘陵先端型山城に属する山城の多くは、街道警備の駐屯を前提とした役割を呈していたものとみられる。

〈単独丘陵型山城〉

里もしくは里に近い単独丘陵を利用して城を構築するもので、川西町を除く米沢市のNo.69堂森山館、No.66川井館、南陽市のNo.21漆山館、高畠町のNo.62館ヶ崎館等16箇所がある。この型の山城は、山城の麓に居館を有するものが多く、No.69堂森山館とNo.70原田館、No.66川井館と東屋敷館といった共存関係を示すのを特徴としている。

〈物見型山城〉

やや低い尾根や背景に高い山を有する手前の丘陵に小規模な遺構を構築するもので、米沢市のNo.96熊野山館、No.56綱木館、No.67羽黒神社館、南陽市のNo.13天狗山館、No.8薬師山物見、川西町のNo.38川西羽山館等11箇所がある。この型の山城は、南陽市の街道沿いを中心に分布する特徴があり、物見台や烽火台の中継・連絡網に関連する山城と考えられる。

〈丘城型〉

平坦で低い丘陵先端や発達した河岸段丘を利用して構築するものであり、所謂「平山城・丘城」と称されるものである。この種の丘城は、比較的大規模な曲輪群を構成するものが多く、概ね14世紀後半頃に発達した一町四方の単郭式の平城とともに出現した城形態と考えられている。また、伊達氏等の関東系武士団の進出の拠点としての関連性を指摘する向きもある。

米沢市のNo.50成島館、No.64同中川原館、川西町のNo.41原田城等が代表といえる。

以上、山城の立地状況と街道の関わりについて、5種類に大別して述べた。山城の立地だけで、年代を想定することは危険であるが、ある一定の方向性は示している。

簡単にいうと、丘城型の城は山城に移行する前段階の城に多い。山頂型山城は、初期山城の成立から発展段階の城に顕著にみられる。丘陵先端型山城は、山城の定着段階の城を中心とするが年代的な幅が存在する。

単独丘陵型山城は、集落に隣接したものが大半で、16世紀後半に集中する特徴がある。民衆共存を前提とした城と位置付けることも可能となる。最後の物見型山城は単独丘陵型山城の間を埋める位置に存在しており、密接な役割を有していたものとみたい。

3) 山城の分類

東南置賜地区に分布する城館址は、前述しているように432箇所を数えるが、大半は既に開田や何らかの開発によって著しく失われ、明確に形状を把握できるものとしては、全体の約4分の1の110箇所にすぎない。

特に平城は顕著で約9割以上が破壊されている現状にある。幸い山城は、南陽市の34箇所と米沢市の34箇所を筆頭に、川西町の11箇所、高畠町の7箇所を含めた86箇所が確認され、76箇所の山城が形状を留めている。しかもその多くは保存状況が良好であり、城の形態や遺構の構造の吟味より、24形態に分類することが可能であった。

今回の館山城も形態から第X段階の典型的な山城を代表とする館山城型として位置付けられる。紙数の関係で残念ながら省略せざるを得ないので、館山城型のみの説明に留め、他は第14図の掲載で参照願いたい。

館山城型は、伊達の主城とされる館山城を典型とした山城で、米沢市のNo52館山城、No73米沢古志田館、No76繰返館（高橋館）、平地の大浦館の4箇所と米沢市に集中する特色がある。

米沢古志田館は、斜平丘陵の山麓を利用して構築した所謂「山寄式」の丘城で、大浦館も掘立川と旧河川の自然堤防を縦堀で切断した平城である。

繰返館は、昭和40年代の土砂採集によって、消滅した山城であるが、昭和37年の柏倉亮吉氏による調査報告や現存する写真などから、ほぼ館山城と同形態であることが想定される。

館山城型を有する城形態は、尾根を切断する構造が特徴で、16世紀前半に出現した赤松山型を基軸として、16世紀の中葉に発展する三沢型に初期原形をみることができる。

三沢型の山城は、鉄砲進出の影響を受けた中で飛躍的に防御構造を発達させたのが館山城型の山城で、二色根型、大洞型、柳沢型の3形態も館山型山城と基軸を同一として同時期に成立した変形型と推測される。

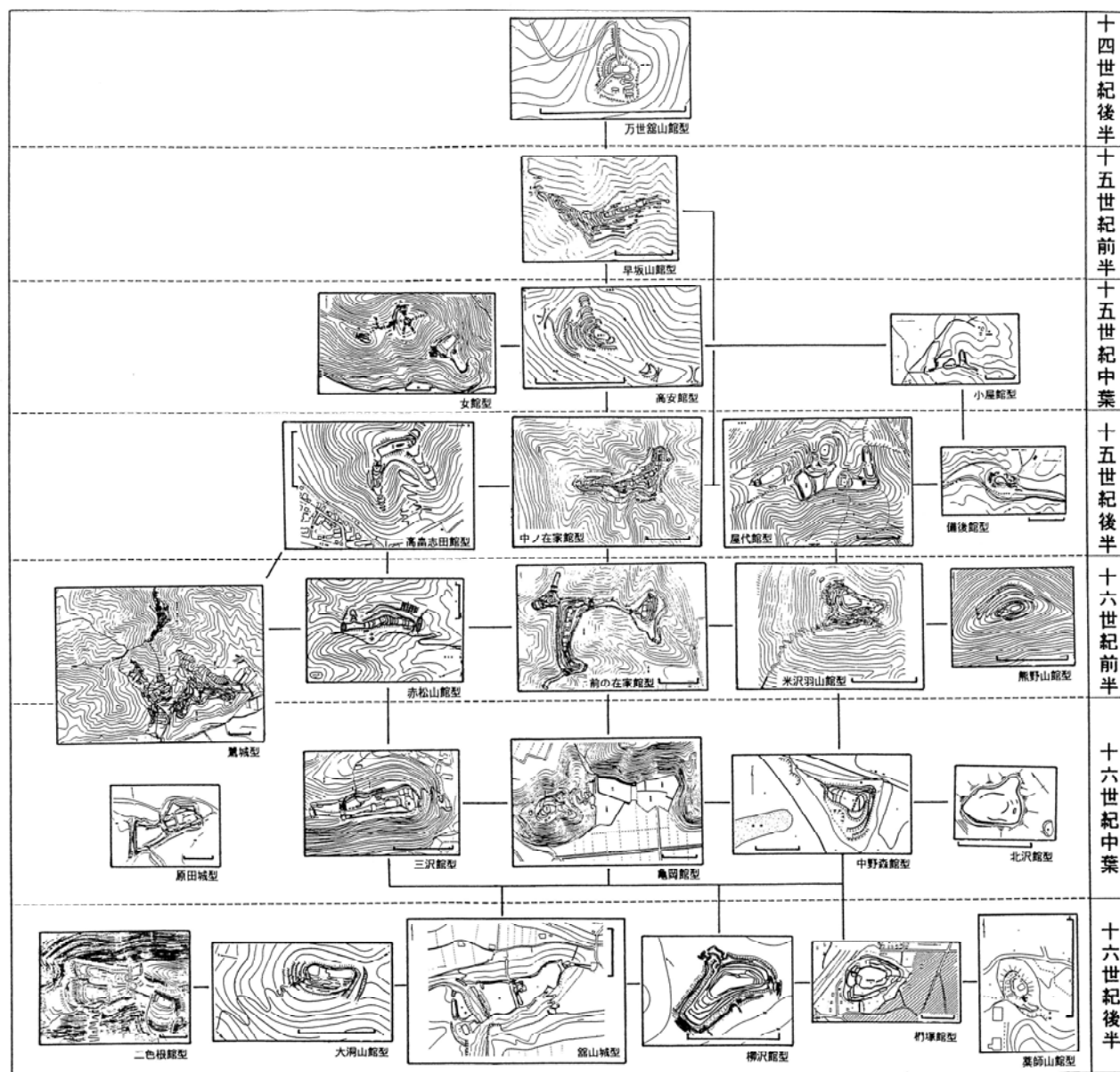
3. 館山城の年代「第14図」

東南置賜地区に分布する中世の山城を分類すると、城の立地と構造形態が類似することがわかってきた。このことは手塚が既に述べているもので、東南置賜地方に現存する86箇所の山城立地と形態を分析し、年代的な形態変容を試論したものが第14図である。紙の関係で詳しく触れることはできないが、その後の事実も加えて簡単に述べてみる。

1) 城の成立と発展

東南置賜地区で確認されている城跡で最も古い例は、米沢市の木和田館跡である。木和田館

第14図 東南置賜地区の山城変容図



第1表 東南置賜地区の山城編年表

14世紀後半	15世紀前半	15世紀中葉	15世紀後半	16世紀前半	16世紀中葉	16世紀後半
			↑ → → → → 鷺城型		原田城型	二色根館型 → ↑ 大洞山館型？
		女館型	↑ 高島志田館型 → 赤松山館 →	↑ 三沢館型 →	↑ 館山城型 →	↑
万世館山館型 →	早坂山型 →	↑ 高安館型 →	↑ 中ノ在家館型 →	↓ 前の在家館型 →	↓ 龜岡館型 →	↓ 柳沢館型 →
		↓ ↓	↓ 屋代館型 →	↓ 米沢羽山館型 →	↓ 中野森館型 →	↓ 柳塚館型 →
		↓ 小屋館型 →	↓ 備後館型	↓ 熊野山館型	↓ 北沢館型 →	↓ 薬師山館型？

は、山麓を利用した約半町四方を有する台形状を示した単郭式の平城であるが、昭和58年の発掘調査で11世紀後半から12世紀前頃の初期武士団の居館であることが判明している。

注目したいのは、木和田館跡の約2 km西側に立地する戸塚山一帯にかけ、奈良から平安時代の遺跡群が約30遺跡近く集中していることであり、戸塚山古墳群の影響を受けて奈良時代に成立した集落跡が、平安時代に入ってより定着していたことを示すもので、安部・清原氏らの活躍していた平安後期には大規模な集落として存在していた。

しかし、その後、安部・清原両氏の滅亡に端を発し、動乱を危惧した戸塚山一帯の集団は、平地から山間地帯へと生活の拠点を移動することになる。戸塚山周辺の遺跡が10世紀以降極端に少なくなり、11世紀代にはいる頃の集落は皆無となっている。

すなわち、三方を山で囲む入り江状の木和田一帯に集落を構成した集団の統轄者「在地豪族」は、南山麓に居館となる木和田館を配置する。さらに、東に「L」字状の土塁を有する馬ノ越館、北に半町四方の平行四辺形を前提とした単郭式の月ノ原館、同じく木和田中屋敷館と四箇所を平城を次々と配備し、周辺地域の防備を固めていったものとみられる。

これらの館跡群は、11世紀後半から14世紀前半にかけての平城と推測され、概ね木和田館→月ノ原館→木和田中屋敷館→馬ノ越館の順に構築していったものと推測する。しかも、全ての城は山麓、つまり山に寄せる方法を基本として、少ない空間（水田地帯）を効率よく利用するのが特徴といえる。このように、木和田館跡群は、初期の平城から定着段階までの変容を示す貴重な平城群といえる。

こういった傾向は、戸塚山周辺に限らず、米沢市の万世地区や川西町玉庭地区、白鷹町十王地区など、置賜一円に見いだすことができる。14世紀代に入ると城の形態に画期的な変化を示すようになる。これまでの平城主体の城の他に険しい山を選定した山城の出現である。山城の出現の背景には、関東武士団の進出や台頭が大きな起因と考えられるが、東南置賜地区の山城出現の時期については今一つ判然としない点もあるが、現在の段階で簡単な帯曲輪を用いて構築している万世館山城が最古とみる。万世館山城には、山麓に半町四方の単郭式を有する稲荷山館が存在し共存関係にあったと考えている。稲荷山館は、平成8年に発掘調査を実施しており、土鍋や土師質の土器が多量に出土しており、概ね14世紀前半～後半の年代が符号する。

15世紀に入ると平城から山城に以降する比率が多くなる。帯曲輪を多様するのがその時期の特徴で、比較的高い山の尾根の多くを複雑に応用した形態が主流となる。

15世紀後半から16世紀前半頃を迎えると土塁や堀切、縦堀といった山城を区画する施設が確立し、明確な主郭や副郭といった構造が意図的に配置され、山城の発展期となる。さらに、中心となる主城の他に多くに小規模な山城が配備されるのもこの頃からで、山城は軍事戦略の重要な役割を果たすことになる。

頃16世紀中葉～16世紀後半になると土塁や堀切の構造が大規模に発達するようになる。山城も巨大化し、籠城的な城から本城として成立するものもみられる。こうした巨大化は、武器の発展に大きく影響しているものと推測される。

とりわけ、弓や槍が主体であったこれまでの戦法に鉄砲が主力武器と加わった脅威を具体的

に防御形態として表現した結果とみるべきである。

2) 山城の年代区分

山城の変遷を年代的に列挙すると第Ⅳ段階から第Ⅹ段階の七段階に区分することが可能であり、以下簡単に説明を加える。

・第Ⅳ段階の城（14世紀後半頃）

山城は、最後の山寄式の平城である稻荷山型が形成された段階で成立したものと考えられる。万世館山館がこれにあたり、14世紀中頃から後半には少なくとも小規模な山城が出現したものと考えられる。初期の山城は、見晴らしのよい舌状丘陵の先端を削平した主郭に帯曲輪を数条施すような簡単なものであったと想定される。

・第Ⅴ段階の城（15世紀前半頃）

15世紀に入ると帯曲輪を多様した側面防備と階段状テラス群を主郭曲輪とする早坂山型の山城の出現に始まる。帯曲輪群と階段状テラス群を尾根に配した主郭の形態は、山城の基本的な構造となるもので、以後の城形態に大きな影響を与えることとなる。

・第Ⅵ段階の城（15世紀中葉頃）

早坂山型の山城から発展した高安型、腰曲輪を多様した女館型、臨時的な山城となる小屋型が出現する。帯曲輪の他に腰曲輪の応用や簡単な堀切も加えることによって山城としての機能を高め、山城の存在の重要性と曲輪の遺構構造を模索する段階といえる。

・第Ⅶ段階の城（15世紀後半頃）

腰曲輪の発達と帯曲輪が鉢巻状に主郭を区画する手法が用いられ、腰曲輪を交互に配した重餅型の曲輪群が出現する。また、山城の防御効果をより鮮明にする側面防備の確立も注目される。主要曲輪の外部には、山肌を削平して急勾配を施した所謂「人工斜面」の応用や尾根からの侵入を防ぐ目的として、堀切の発達も重要な施設として確立するのもこの段階の特徴である。

この段階の城としては、高島志田型・中ノ在家型・屋代型・備後型といった特色ある四形態がみられる。

・第Ⅷ段階の城（16世紀前半頃）

山城の発展期がこの段階の城である。重餅型式を主郭として確立した米沢羽山型。帯曲輪を階段状テラスとして定着する前の在家型、熊野山型が出現する。また、これまでの単郭式を有していた山城に副郭や物見台などを付随する所謂「複郭式」の構造を呈した前の在家型、鷺城型も登場する。

さらに、堀切の一部には土塁を併用する形態や階段状のテラス群を空堀で形成した、所謂「畝状横堀」の発達と防御構造がより一層充実した段階の時期といえる。

・第Ⅸ段階の城（16世紀中頃）

山城の定着段階がこの時期となる。これまでの山城の主郭となっていた小規模な階段状テラス群は衰退し、明確な主郭構造として機能する三沢型、中野型、北沢型などが出現する。一方、亀岡型に代表されるような山城と居館が隣接して機能する山城も登場する。

さらに、三沢型に顕著である畝状横堀も土塁を配した形態と発展し、より側面防御を強固に

する傾向がみられるのもこの段階の特徴である。

・第Ⅹ段階の城（16世紀後半頃）

山城の最終段階がこの時期である。この段階の最大の特徴は、主郭構造が大規模化するもので、これまでの臨時的な城や有事の際を想定した構造より居館及び主城とといった機能を重視するようになる。館山城型や二色根型はまさにその典型であり、他に大洞山型・柳沢型・櫛塚型といった籠城を前提とする防備を駆使する山城も出現するのがこの段階の特徴といってよい。

これまで城の成立と発展を簡単に述べてきたが、山城に限ってその推移を列举すれば次の要になる。十分な調査や検討資料が少ないこともあって年代根拠に関しては課題もあるが、あえてつけ加えた。

第2表 東南置賜地区の城館編年表

編年	第Ⅰ段階	第Ⅱ段階	第Ⅲ段階	第Ⅳ段階	第Ⅴ段階	第Ⅵ段階	第Ⅶ段階	第Ⅷ段階	第Ⅸ段階	第Ⅹ段階
年代	12世紀	13世紀	14世紀前半	14世紀後半	15世紀前半	16世紀中葉	15世紀後半	16世紀前半	16世紀中葉	16世紀後半
東南置賜の山城				万世館山型	早坂山館型	女館型 高安型 小屋型	高島志田型 中ノ在家型 屋代型 備後型	鷲城型 赤松山型 前ノ在家型 米沢羽山型 熊野山形	川西原田型 米沢三沢型 亀岡型 中野森型 北沢型	二色根型 大洞型 館山城型 柳沢型 櫛塚型 薬師山型
平城	木和田型1	木和田型2	成島型 稲荷山型1	梓山型 稲荷山型2	中川原型 三月在家型	我妻型	米沢城東二の丸型 玉館型	蒲生田型	米沢原田型	萩生型

さて、館山城をみると土塁や堀切の巨大化、それに曲輪の広さを考慮すれば、16世紀の後半の第Ⅹ段階の城となる。この種の仲間には、南陽市の二色館、同宮沢城、同櫛塚館、上山市の中山城、川西町の柳沢館、白鷹町の荒砥城等が同一年代軸に存在するものといえる。

Ⅳ まとめ

館山城の一带に注目される遺構が確認されている。羽山神社から斜平丘陵の尾根南の方向に進むと尾根の頂上付近に川の流れたような幅4m～5m、深さ2m～4mを有する深い溝が館山城の方向に存在する。同様な溝状遺構跡は、館山城の北側の館山矢子町の北東にも存在しており、通称「ばか堀」等と称されている。さらに、矢子山城の西側の尾根にも同様な溝が田沢方面にかけて伸びており、館山城を中心とした周囲に存在する特異な不思議な溝状遺構は、軍道と考えている。溝状の道路は、山城の堀底道と同様に大量の兵士を敵に気付かれずに移動する際に利用するものであり、置賜地方の街道沿いの尾根を中心に現在10箇所ほど確認されている。また、館山周辺は福島に抜ける会津街道や越後街道の要所でもあり、綱木地区にかけて